

氏名	AHMET METE TUNCOKU ア-メット メテ ツンジョク
学位の種類	法 学 博 士
学位記番号	法 博 第 5 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	法 学 研 究 科 政 治 学 専 攻
学位論文題目	19世紀の日本とトルコの政治的近代化運動に於ける外国人の 役割

論文調査委員 (主査) 教授 高坂正堯 教授 福島徳寿郎 教授 野口名隆

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は十八世紀の終わり以来の日本とトルコの近代化が多くの同一面と相異面を持つことに注目し、その異同性を、近代化運動における外国人の役割に焦点をあてて解明したもので、四つの章と結びから成る。

著者はまず第一章「日本とトルコの政治的近代化運動の異同」において、「近代化」及び「政治的近代化」についての通説的定義を紹介したあと、両国の政治的近代化における類似面と相異面とを手短かに論ずる。類似面は、両国が歴史の早い時期に他の文明によって強い影響を受けたこと、近代化への努力がヨーロッパの脅威に対する「防衛的な性格」のものとして始まったこと、近代化への努力が上からなされたこと、そして近代化のためにヨーロッパに模範を求め、外国人を招いたことである。相異面として著者はまずトルコが衰退途上の過去の大帝国であるのに対し、日本は孤立にけつ別したばかりの国家であったこと、それ故、トルコでは「はえある過去の蘇生」が近代化の目標となったのに対し、日本のそれはヨーロッパ文明の導入による「新強国の創造」であったことをあげる。それはトルコが三大陸の中央に位置する自然の橋とも言ふべき場所にあったのに対し、日本がヨーロッパから遠く離れた島国であったことと関連する。第三に、日本は徳川時代に同質性の高い社会となったが、トルコは多くの異民族を含むモザイクの如きものであった。最後に、トルコは神政的な社会であったが、日本では政治権力は世俗化されていた。

第二章「十九世紀の日本の政治的近代化に於ける外国人の役割」は七節からなるが、第一節から第四節は導入部と言うべきものである。そこでは、日本が異文化を取り入れながら、それを自分のものとして形成発展させたこと、徳川時代に国内産業が発展し、通信・運輸手段が発達すると共に、官僚制が作られたこと、明治の指導者たちは近代化に際してそれらの基盤を持っていたことが、トルコとの対比において強調されている。第五節「お備い外国人の必要性」では、ヨーロッパの技術、知識の導入への日本の指導者の態度が描かれると共に、行政組織の存在故に日本政府はお備い外国人を組織的に取り扱うことができた点が指摘されている。第六節では、そうした政府の統一的政策の存在が統計によって裏づけられることが、

梅溪昇氏の研究に依拠して述べられている。日本政府は近代化のために必要な知識・技術を即座に入手するため外国人を備ったのであり、それ故、早くから留学生を大量に送り出し、間もなく「お備い外国人」は彼らによってとってかわられることになった。第七節「著名なお備い外国人達」においては、重要な地位についた外国人と日本政府との関係が扱われている。ロエスレル、デニソンなど何人かの人々は、単に日本政府に使われるにとどまらず、重要な政策決定についての助言さえ求められた。しかし、それはあくまで相互の信頼関係に基づく助言であり、決定そのものは日本人が行ったことを著者は力説している。

第三章「十九世紀のトルコの政治的近代化運動に於ける外国人の役割」は第二章第一節～第六節に対応する。第一節と第二節ではオットマン帝国の起源と諸制度が概観され、ヤニサリーに見られるような帝国の制度の硬直性、マホメット教徒が政治・戦争・宗教・農業にしかたずさわらず、産業と貿易は非イスラム教徒にまかされたこと、「ミレット制度」の分離主義的傾向がキャピチュレーションによって強められるに至ったことが注目される。第三節ではトルコの近代化努力と外国人の役割が扱われる。トルコでは十八世紀になって帝国の衰退が明らかになると近代化の努力が始められたが、それに対してトルコ内部に根強い抵抗があり、またトルコの指導者の注目した近代化の側面は狭く、物質的なものあるいは軍事技術的なものに限られた。そして彼らには外国人の提案を採用する意欲に欠けるところがあった。こうした現象の背後には、ヨーロッパに対する「軽蔑意識」が作用していたことを著者は指摘している。雇用された外国人の役割の小ささと対照的にトルコにある在外公館にいる外国人の影響力が大きかったことを著者は力説する。その理由はヨーロッパ列強とオットマン政府がお互いを必要としたこと、キャピチュレーションによってヨーロッパ列強が少数民族保護権を持っていたことである。ただ彼らの影響力は概ね近代化の方向に沿っていたが、しかしそれがヨーロッパ列強の利益を害しないという大きな限界があった。

上述の一般的考察は第四章「ストラトフォード・カニングと十九世紀のトルコの政治的近代化に於ける彼の役割」において裏づけられる。著者は十九世紀のトルコにおいてもっとも大きな影響力を持っていた外国人としてイギリスの外交官ストラトフォード・カニングを選び、その役割を考察する。まず、第一節及び第二節で、カニングの通常的外交行動と彼のトルコ観に触れたのち、第三節以下でカニングがトルコの改革に関心を持ち、それに関与した様子が描かれる。彼はスルタン・マームド二世の改革に接してトルコの改革に関心を持つようになり、その関心はスルタン・アブドル・メジッドの下、大臣レジット・パンヤとの友好関係の下で一層強まった。カニングは「1824年から1856年まで、トルコの全ての改革運動の背後に控えていた」。クリミア戦争後、ヨーロッパの列強がトルコの改革のために圧力をかけるようになった。しかし、トルコの改革は望まれた成果を生まなかった。それはトルコがその資源を有効に使わず浪費したことと共に、トルコが自らの力で改革を行うことができず、外国及び外国人の圧力を必要としたこと、その外国人は治外法権の維持と自由貿易制度の維持、キリスト教徒の保護など、自国の利益により忠実であり、それが真の改革を妨げたことによるものであり、カニングもその例外ではなかったと、著者は第六節「トルコの政治的近代化に於けるストラトフォード・カニングの役割についての注釈」で述べている。この第四章は第二章第七節と対応している。

結び「十九世紀の日本とトルコの政治的近代化運動に於ける外国人の比較的役割に関する一般的評価及び結果」は、これまでの考察をまとめたもので、両国の近代化の異同の原因となった諸要因を整理して述

べるなかで、外国文明に対する両国国民の態度と指導者の資質の相違が強調されている。それは日本がお傭い外国人を、目的意識を持って、組織的に取り扱ったのに対し、トルコでは結局母国の国益を尊重することになる外交官がもっとも重要な役割を果たしたことに端的に現われているとして、著者は論文を終えている。

論文審査の結果の要旨

近代化は、政治学の研究対象として、過去十数年にわたってしばしば取り上げられて来た問題であるが、現象の性質が複雑で多様であるので、未だに考察されるべき側面が少なくない。そのひとつは、一国の政治的、経済的、社会的な特質と外部的衝撃の態様及び強度などとの相互作用の解明である。

本論文はそうした問題点を、近代化努力の行われる国における外国人の役割に焦点をあて、さらにそれを日本とトルコの比較研究という方法をとって考察したものである。それは、これまでの近代化研究の成果を十分に摂取することに始まり、その基礎の上に立って、比較研究に際して両国の「お傭い外国人」を比較するという機械的な方法をとらず、日本における「お傭い外国人」とトルコにおける外交官とを比較した点で興味深い論文となっている。また、カニングについての研究は、カニングとトルコの近代化努力の関係を扱った最初の本格的な研究である。

以上の三点により、本論文は高い水準のものであり、法学博士の学位を授与するに値するものと認める。